

津の国の難波なにはの浦のかきなればうみわたらねど塩しほはつきけり

物くさ太郎

『御伽草子』『物くさ太郎』より。信濃国筑摩郡あたらしの郷に、物くさ太郎という名の不思議な男が住んでいた。どれほど物くさ(怠け者)だったかというと、働くことをしないので食べ物はずべて貰い物。ノミ、シラミ、垢にま

みれて、日がな一日小屋で寝そべっているだけ。大事にとっておいた餅(貰い物)を寝転びながらもてあそんでいる内、取り落として外へ転がっていつてしまった際も「誰かが通つたら拾ってもらおう」とそのまま放置。

そんなスパー物くさ者は、妻探しの方法も凄い。男を連れず車にも乗っていない通りすがりの女から、気に入ったのを捕まえる「辻取つじとり」に挑戦。「清水寺へ行つて狙うがよい」との超実践的アドバイスを受け、早速年の頃十七、八の美人の女を発見、「抱いだきつかん口をも吸すはばや」と大手を広げて近づいていく。驚いた女は当然ながら「あな恐

ろしや」となって、そこかしこを駆け回り、なんとか逃げおおせた。しかし余程女を気に入ったのか、太郎は物くさせず、執念深く追跡し、なんと家まで突きとめる。

男を不気味がりながらも、情け深い女は古い畳を縁に敷き、栗柿梨と小刀と塩を籠に盛つてあげ一晩の居座りを許すことに。ポジティブな太郎は、それを見て、ひとつの籠に盛るといふことは「一緒になろう」という意味だろう。栗は「繰くりり、言を言うな」、梨は「私には夫も恋人も無し」という意味だろうと解釈し、残る柿と塩を見つめて詠んだのが冒頭の一首。

歌意は「津の国の難波の柿(牡蠣)なので、熱み(海)渡らないけれど塩がついているのだ」。これを聞いた女は、「この人見かけによらず風流人なのかしら」と心を動かされる。その後、歌を交わしたりしているうちに太郎の心の深さに惹かれ、これも前世の約束事なのだと思ひ、深く契ることになったという。

「三年寝太郎」「隣の寝太郎」「力太郎」など類型説話は全国に数あるけれど、歌の力にポイントを置いた「物くさ太郎」は怠け者歌人の希望の星である。(小島なお)

